

国語

時間
60分

「注意」

- 1、放送で指示があるまで、この冊子さつしを開いてはいけません。
- 2、この冊子は23ページまであります。ページが足りなかったり、順序がおかしかったり、また印刷が不鮮明ふせんめいで読めない部分があったりした場合には、手をあげて監督かんとくの先生に申し出なさい。

- 3、問題についての質問は一切受け付けません。

- 4、下書きにはこの冊子の下書き欄らんや余白を使いなさい。

- 5、字数指定のある問題では、句読点やカッコなども字数に含みます。



(このページは空白です。)

(このページは空白です。)

一、次の①～⑤の文の——線部のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

① どれほど困難な事態に直面しても、彼はセツソウを守り通した。

② 今年新しくシュウコウした豪華客船のチケットを、格安で入手した。

③ 初出場のチームであるにもかかわらず、ハチクの勢いで勝ち進んだ。

④ 厳しい状況じょうきようの中での気持ち方にこそ、その人のシンカしんかがあらわれる。

⑤ ヘイゼイから食事をコントロールして、健康に気を付けている。

二、次の①～⑤の文の~~~~線部は、() 内の意味を表す言葉です。例にならって、 にあてはまる言葉をひらがなで答えなさい。ただし、 には、「い」で終わる「」内の文字数のひらがなが入ります。

例
湖のほとりでたたずんでいると、心地 風が吹き抜けた。(すがすがしい) [二]
↓〈答〉よい

① 卒業式が終わり、名残 気持ちで校門を出た。(別れることがつらい) [三]

② 新しくできた商業施設には、物見 人たちが集まってきた。(好奇心が強い) [三]

③ いつも謙虚な彼の奥 人柄は、みんなの心をひきつけた。(慎重深い) [四]

④ けがで実力が出し切れず、歯 思いをした。(思うようにならずにじれったい) [三]

⑤ 何かと世知 都会の生活をやめ、故郷に戻った。(暮らしにくい) [三]

三、次の文章は、伊予原新の「山を刻む」の一節である。「わたし」は専業主婦として家族のために尽くしてきたが、二人の子供、麻衣と晴彦が成長するにつれて、「わたし」と家族との間に距離が生じてきた。若いころ山が好きだった「わたし」は、山小屋の主人から話を持ちかけられて、山小屋をかうかどうか悩んでいるが、家族には伝えられずにいる。問題文は、家族との大事な予定を初めてすっぽかして登山に来た、その帰りの場面である。これを読んで、あとの問いに答えなさい。

登山道の曲がり角から平らな岩が突き出ていたので、そこに学生さんと並んで腰を下ろした。木々の間から、ふもとの国道とその先の湖まで見通せる。あれが菅沼だろう。

先生は、そそくさと斜面を下り、林の中に消えていった。

「面白い先生ですね」わたしは学生さんに言った。

「ギャグは超寒いですよ」

「何だかんだいって、いいコンビに見えますけど。研究室、やめたいわけじゃないんでしょう？」

「まあ」学生さんは、小石を一つ、指ではじいた。「やめないと思いますよ。これ以上落ちこぼれたら、さすがにカッコつかないんで」

「落ちこぼれ？」

「僕、二浪してるんですよ。ずっと医学部目指してて。じいちゃんも親父もいとも、みんな医者なんです。いくら医者の家系でも、たまにはバカだって生まれるじゃないすか。弟が医学部に入ったんで、僕はもういいかなって」

「——そう」わたしはそつと言った。

「適当に今の大学に入って、適当に就職しようと思ってたんですけど、四年生になったら研究室に入って卒論やんなきゃなんないでしょ。ラクそうな研究室ないかなーって探したら、あの先生につかまってる。『お前、なんでそんなにやる気ねーんだ？』って訊くから、軽くさつきみたいな話したら、大喜びしちゃって」

「なんで喜ぶの？」

「『お前のような学生を待っていた。うちの研究室に来て、^①火山の医者になれ』って」

「火山の医者——」意味は何となくわかるが——。

「例えば、うちの先生はこの日光白根山のホームドクターみたいなもんです。噴火史とか噴火のクセを誰よりよく知ってる。で、『メスで人間を刻むかわりに、ハンマーで山を刻め。火山の医者になって、

何十万、何百万の人々の命を救うんだ！』って、一人で盛り上がっちゃって」

「へえ、いいお話」

「いやいやいや」学生さんは大げさにかぶりを振った。「あの人の口車に乗っちゃったのは、僕ぐらいですよ。不人気研究室で、誰でもいいから人手が欲しかっただけ」

「そうなんですか」笑いながら言った。

「でもまあ、『命を救う』って言葉には、ぶっちゃけ僕も弱いし」

「医者のお血ですね」

「それに――」学生さんが、もう一つ小石をはじく。「^②あの人と一緒にやってみるのが、一番確率高
いっしょ」

「確率？ 何の？」

「将来、やっててよかったな、面白いな、と思える確率。だってあの人の、自分のやってることが世界一面白いって、マジで思ってますからね。仕事なんて辛いもんだ、歯を食いしばってやるもんだ、なんて言うオヤジのもとで働いて、面白いわけないですもん」

「ふうん、面白い考え方」

「実際、好きなことだけやって生きてる大人、初めて見ましたから。そんな人、マジでこの世に存在するんだって、結構衝撃で」

表現こそ若者らしいが、彼の感じていることはわたしにもわかる気がする。つまるところ彼は、先生の生き方に感染したいのだ。そばで同じ空気を吸っていたいのだ。弟子にそう思われるのは、師匠として最高のことだろう。

それに比べて、親としてのわたしは――。

小さく息をついたとき、わかってしまった。

わたしはきつと、もう迷ってなどいない。覚悟が足りないわけでもない。

わたしは、麻衣と晴彦に何をどう伝えるべきか、わからないでいるだけなのだ。あの子たちに何もわかつてもらえないまま、勝手な親だと思われて終わるのが、怖いのだ――。

すぐうしろの登山道を、中高年のグループががやがやと通り過ぎていく。

「にしても、どこにいるんすかね、山ガール」学生さんがぼつりと言った。

「ほんとにね。がっかりよねえ、わたしみたいなおばさんばかりで」

「なんで、みんなこぞって山に来るんですかねえ。子育ても終わったし、みたいな感じですか」

「わたしの場合は——それに加えて、犬が死んじゃったから、かな」

「もしかして、それですか」学生さんが、わたしのザックに付いたキーホルダーを指差した。舌を出したジロの写真が入っている。「さっきから気になってたんすよ」

「そう。御守りのかわり。クマから守ってねっていう」

ジロが死んだのは、一昨年の春先。十五歳だったので、長生きしたほうだろう。

麻衣が小学生のとき、クラスメイトのところで生まれた三頭のうちの一头だ。どうしても飼いたい、責任をもって世話をするとあの子が言うので、うちでもらうことになった。呼びかけるとこつちをジロリと見上げるから、ジロ。麻衣が名付けた。雑種だが、きれいなキツネ色の毛並をしていた。

子犬のころは、麻衣も晴彦もそれなりに世話をした。数年経って子供たちが中高生になり、部活や塾で忙しくなると、朝夕の散歩に連れていくのもエサをやるのも、すべてわたしの仕事になった。

ジロもまた、他の家族同様、わたしの愛を刻んだ。でもあの子は、誰よりわたしを純粋に求めてくれた。素直に感情のやり取りをしてくれた。刻んだ傷を舐めてくれた。

最期は心臓を患い、入院していた動物病院から引き取った帰りの車の中で、わたしの腕の中で死んだ。その喪失感は、初めて味わうものだった。

よく同じ時間に犬の散歩をしていて親しくなった近所のお友だちが、登山のグループに入っていた。ふさぎこむわたしを見かねたのだろう。彼女が山に誘ってくれた。何度かそのグループの山行に参加し、やがて一人でも登るようになった。

山道を踏みしめ、木々の香りを嗅いでいるうちに、わたしの中に眠っていたいろんな記憶と感情が甦ってきた。③頂上に立ち、深呼吸をするたびに、わたしはわたしに戻っていった——。

「先生と山に来るのは、何回目？」わたしは学生さんに訊いた。

「二回目です」

「やっぱり、好きになれませんか」

「石担いで登ってるときは、もう二度と来ねえ、って思います。でも、下りてきてザックを下ろしたら、また来てもいいかなって——まあ、一ミリぐらいは思います」

人との出会いというのは、つくづく不思議なものだと思う。人生というルートに分岐点は、初めから地図の上にあるのではない。人との偶然的な出会いが、気まぐれにそこに分岐を作るのだ。

この学生さんの、先生との出会いもそう。わたしの、この二人との出会いもまたそうなのかもしれない。

去年の夏。登山を再開して初めて、泊りがけで南アルプスに登った。単独行だ。甲斐駒ヶ岳と仙丈ヶ岳にはさまれたその山は、イメージこそやや地味だが、高山植物の宝庫として知られている。眠っていた「ニュー・F-1」を三十年ぶりに持ち出したのも、このときだ。

天気にも恵まれ、気持ちよく八合目までたどり着いた。その日はそこにある小さな山小屋に泊まることにしていた。山小屋は、森林限界のすぐ上、凜とした岩稜とハイマツが美しいカール地形を見上げることのできる素晴らしい場所に建っていた。

日暮れ近く、山小屋のそばに咲いていたクルマユリにレンズを向けていると、「懐かしいカメラですね」と声をかけられた。それが、あの人との出会いだ――。

ガサガサと草木をかき分けながら、先生が斜面を上ってきた。その姿を見た学生さんが、声をひそめる。

「④ さっきの話、先生に言っちゃダメですよ。あの人、すぐ調子に乗るんで」

「わかってますよ」

登山道まで来た先生が、とがめるような目で学生さんとわたしの顔を見比べる。

「A、俺の悪口言ってたな」

「他にどんな話題があるんすか」学生さんは「B 当然とばかりに言った。」

谷を下り、笹原の中をしばらく行くと、大きな案内板が見えてきた。登山口はもうすぐだ。

緩やかな林道の道幅が、だんだん広くなる。わたしをはさんで先生と学生さん。三人横に並んで歩く格好になった。間もなく五時半。木々の隙間から差し込む西日がまぶしい。

さっきからわたしは、歩みを緩めなくなる衝動にかられている。一人だったら、そうしたかもしれない。

このまま山を下りてしまっているのか。わたしはまだ、子どもたちにかけるべき言葉を、見つけられていない。

風が出てきた。わずかに湿り気を感じる。天気予報では、明日からまた梅雨空に戻ると言っていた。ひととき強く吹きつけてきた風を正面に受け、わたしの左で学生さんが両手を広げる。

「あー、気持ちいいー」

疲れた体の芯から出たような声だった。わたしの右で先生が首を回す。

「⑤ な？」

「何すか？ な、って」

学生さんはわたしの頭越しに訊き返した。先生が、目尻にしわを寄せて言う。

「山って、いいだろ」

聞いた瞬間、わたしの足だけが止まった。

山って、いいでしょ――。

その台詞を、わたしは言ったことがない。

なぜわたしは、今まで一度も、あの子たちを山に連れてきてやらなかったのか。なぜわたしは、自分の人生を生きているところを、あの子たちに見せてやらなかったのか。なぜわたしは、二人の前で、押しつけがましいほどに山の魅力を語ってやらなかったのか。

わたしの一番大きな失敗は、きつとそれなのだ――。

先生と学生さんが、驚いた顔でこつちを見ていた。わたしは「すみません、何でもありません」と言いながら、小走りで追いつく。

今からでも、間に合うだろうか。いや、間に合わせたい。説明などいらぬのだ。あの子たちにかかる言葉は、それだけでいい。

⑥ わたしの心は、決まった。

菅沼登山口の駐車場では、登山客たちが靴紐を解き、帰り支度をしていた。

先生の車は、大きなタイヤの四輪駆動車だった。トランクにザックをのせると、学生さんは「自販機探してきます。炭酸飲みたいんすよ」と言って茶屋のほうへ歩いていった。

わたしはザックの頭からスマホを取り出し、先生に言った。

「電話を一本かけてもいいですか」

「ご家族にですか」

わたしは「いえ」と小さく答えながら、発信履歴にその番号を探す。また心が揺れないうちに、伝えてしまったかった。

数回の呼び出し音のあと、向こうの受話器が上がった。電話に出たのは本人だった。ふた言ほど言葉を交わしたあと、わたしは告げた。

「わたし、決めました。来週にでも、そちらに参ります」

先方の問いかけに二つほど答え、最後にわたしが「よろしく願います」と言って、通話はあつさ

り終わった。

ほっとしたわたしが微笑みかけたので、訊いてもいいと思ったのだろう。先生が言った。

「何を決めたんですか？」

「山小屋をかうんです」

「え!？」先生が目を丸くする。「ど、どこの!？」

「南アルプス」

「なんでまた、そんなことに——」

あの日、クルマユリにレンズを向けていたわたしに声をかけてきたのは、山小屋のご主人だった。一人で来て、古いカメラで写真を撮っているわたしに、興味を抱いたらしい。

夕食のあと、食堂でご主人と話し込んだ。ご主人の年齢は、七十五。アルバイトの学生を使いながらずっとご夫婦で営んでいたそうだが、奥さまがその前年に亡くなったという。ご主人も長年、リウマチに悩まされていて、そろそろ小屋を手放そうと考えているとのことだった。

基本的に、国立公園内に民間人が新たに山小屋を開くことはできない。古くからある山小屋だけが営業を認められているが、それは要するに既得権益だ。実際、北アルプスや南アルプスの山小屋は、かなり儲かる。権利を買い取りたいという人や会社は、いくらでもあるだろう。

わたしがそう言っていると、ご主人は「商売っ気だけの連中には、いくら積まれても譲らんよ」と首を横に振り、「^⑦ここを託すなら、あなたのような山好きの素人がいい」と付け足した。「こんなところで写真を撮りながら暮らしたら、夢のようですけど」と受け流すわたしに、ご主人は「まあ、まずは何度かここへ足を運んでください」と真顔になって言った。

本気にしたわけではない。にもかかわらず、その年のうちに二度、引き寄せられるようにしてその山に登り、山小屋に泊まった。夏の終わりと、紅葉の時期だ。そのたびに小屋を受け継ぐという話になり、それがだんだん具体的になっていった。

わたしのどこを見込んでそんなことを持ちかけてくれたのか、ご主人に訊ねたことがある。ご主人はにやりとして、「あんたのカメラだよ」と言った。「ものを長く大事に使える人間でないと、山小屋の主人はつとまらんからね」と。

そして先月。四度目の訪問をした。あとはわたしの決心次第ということで固まったプランは、こうだ。まず、この夏からご主人のもとで働き始め、経営のノウハウを学ぶ。三年で独り立ちするのが目標だ。ご主人は引退後もふもとの町で暮らす予定なので、何かあれば助けてもらうことはできる。

買い取りについては、あまり厳しいことは言われていない。その時点で払^{はら}える額を頭金にして、あとは毎年の売り上げの何パーセントかを支払うという形でいいそうだ。

営業期間は、五月中旬^{ちゅうじゅん}から十月下旬。一年の約半分、埼玉の家を空け、山にこもることになる。夫と晴彦には、自分のことは自分でやつてもらおう。誰かの世話が必要だとお義母^{かあ}さんが言うなら、その間だけ義妹^{いもうと}のところに行つてもらうしかない。義妹の住まいは大宮^{おおみや}なのだから、大変でも何でもない。もちろん、家族に伝えるのはこれからだが――。

わたしの話を聞き終えると、先生はまだ信じられないという表情で、ゆつくりかぶりを振った。

「ここ数年で聞いた中では、断トツで一番うらやましい話ですよ」

そこへ、学生さんが戻ってきた。派手なデザインのペットボトルを握^{にぎ}っている。

「おい、今度、山へ行くぞ」先生が出し抜けに言った。

「は？ 今下りてきたばっかだし」

「石採りじゃねーよ。この人の山小屋に泊まるんだ。南アルプス。最高だぞ」

学生さんは、何言つてんの、という顔で首をかしげ、ペットボトルのふたをねじ開けた。プシュッといい音が響^{ひび}く。

学生さんは飲み口をくわえるようにして、勢いよくのどに流し込んだ。額の汗^{あせ}が、夕日にきらきら輝^{かがや}いている。若者らしい、いい顔だと思った。

⑧ わたしは想像する。

晴彦は、わたしの山小屋に来てくれるだろうか。ぜえぜえ言いながらザックを下ろし、わたしが手渡^{てわた}した水を飲みほして、あんな顔を見せてくれるだろうか。

そしたらわたしは、「山つて、いいでしょ」と笑顔^{えがほ}で言つてやるのだ。「まあ、思つてたよりは」でも答えたら、次はこう言つてみよう。「山小屋の仕事を手伝つてみない？」と。

—— 伊予原新「山を刻む」（『月まで三キロ』所収）による

（問題作成上の都合から一部原文の表記を改めた）

（注） * 1 ニューF-1……カメラの名前。

* 2 リウマチ……病気の名称^{めいしやう}。

* 3 ノウハウ……方法。

問一 A ・ B にあてはまる言葉を、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ア さぞ
- イ さも
- ウ さる
- エ さらに
- オ さては

問二 ———線部①に「火山の医者になれ」とありますが、この発言をしたときの「先生」の心情について説明した文として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 医学部を目指していた学生と火山研究において手を取り合えば、今までになかった研究ができるのではないかと興奮を抑えきれずにいる。
- イ 火山の研究は人生をかけるほどの価値があるものであり、人生の目的が見つからず時間に余裕のある学生は、まさに研究に適した人材だと喜んでいる。
- ウ 明るく振る舞ってはいるものの、医者になってほしいという家族の期待に応えられずに傷ついている学生に対して、新しい目標を提示することで励まそうとしている。
- エ かつて医学部を目指していた学生であれば、多くの人の命を救おうという志を抱いて火山の研究に励んでくれるだろうと期待を寄せている。
- オ 人手不足だったため、自分の研究室に入ってほしいと思っており、「火山の医者」という大きな表現をすることで、医者という言葉に弱い学生の心を揺さぶろうと思っている。

問三——線部②に「あの人と一緒にやってみるのが、一番確率高いっしょ」とありますが、このときの「学生さん」の心情について説明した文として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 将来について確固とした目標がもてなかったが、好きなことに打ち込んでいる先生に魅了され、先生のもとで研究を手伝いながらその生き方に触れることで、自分の人生を充実させたいと思っている。

イ 火山の研究が世界で一番面白いと自信をもっている先生の生き方に感激し、その先生の近くで学ぶことを通じて、自分もまた、仕事を楽しみながら社会に貢献できるような人物になりたいと思っている。

ウ 医者の家系で落ちこぼれてしまったけれども、研究に一心に取り組む先生とともに歩んでいく中で、先生の言うように「火山の医者」にさえなれば、家族に引け目を感じることなく生きていけるのではないかと考えている。

エ 医学部合格を目指して時間をかけて努力してきたが、先生のように自分のやっていることが一番面白いのだと思って研究に取り組めば、あまり労力をかけることなく、自分の思い描く人生を實現できそうだと思っている。

オ 受験に失敗してからはやりたいことも見つからず、ただ辛い思いをしながら仕事をするつまらない人生を送るだろうと思っていたが、先生と出会ったことで仕事に喜びを覚え、どんな仕事にも価値を見いだせるのではないかと考えている。

問四——線部③に「頂上に立ち、深呼吸をするたびに、わたしはわたしにもと戻つていった」とありますが、どういうことですか。その説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ジロが死んでしまったことで心が沈んでいたが、山道を踏みしめるうちに、ジロの世話をして
いたときの思い出がよみがえり、今もジロが近くにいるような気持ちになれたということ。
イ 山の頂上に立つて落ち着いて過去を振り返ると、ジロが亡くなったことや家族に時間を奪われ
てきたことが思い出されて、いかに自分を犠牲にしてきたかが再確認されたということ。
ウ 家族との関係性が悪くなっていく中で、心の支えであったジロが死んでふさぎこんでいたが、
久しぶりに山に登るようになって、少しずつ本来の自分に立ち返ることができたということ。
エ 先生や学生さんとともに山頂の空気を吸うたびに、少しずつジロを失った悲しみが癒やされる
気がして、これからは自分らしい生き方を貫いていこうと決意したということ。
オ ジロが死んで山登りに熱中することで、これまでうまくいっていなかった家族のことを忘れる
ことができ、かつての自分の記憶や感情を次第に取り戻してきたということ。

問五 ― 線部④に「さっきの話、先生に言っちゃダメですよ。あの人、すぐ調子に乗るんで」とありますが、「学生さん」がこのように言ったのはどうしてですか。四十字以内で説明しなさい。

【下書き欄】—— 必要ならば使いなさい。

A blank coordinate grid for plotting. It features a vertical dashed line and horizontal dashed lines. The x-axis is labeled with 40 on the left and 20 on the right.

問六——線部⑤に「な？」とありますが、この表現について説明した文として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 威圧^{いあつ}するような強い口調で、相手に同意を求めていることを表している。
- イ 親しげな言い回しで、相手の反応が初めからわかっていたことを表している。
- ウ 短く言い切ることで、今の気持ちを相手に押し量^おってほしいということを表している。
- エ 軽い調子の言い方で、相手との距離^{きょり}を縮めようとしていることを表している。
- オ 問いかけの形を用いて、相手の興味を引こうとしていることを表している。

問七——線部⑥に「わたしの心は、決まった」とありますが、ここに至るまでの「わたし」の心情について説明した文として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 先生や学生さんと話をする中で、山が好きだった昔の自分と冷静に向き合えるようになり、たとえ押しつけがましくても家族に対して山の魅力^{みりょく}を伝える決心がついた。
- イ 自分らしさとは何かということに日々悩^{なや}んでおり、家族のことでも苦悩^{くのう}してきたが、自由に生きる先生と話すうちに、山に魅了^{めいりやう}される自分のことを家族に伝えようと思い始めている。
- ウ 家族とどのように向き合えば良いかと困惑^{こんわく}していたが、山を愛する先生の素直^{すなお}な言葉を聞いて、家族に対する愛情を示すには率直^{そつちよく}さが大切なのだと気づいた。
- エ 心のつながりを感じるような先生と学生さんのやりとりを耳にすることで、自分もまた、うまくいっていなかった家族との間に同じような関係を築いていこうと思っている。
- オ 家族にかける言葉が見つからないままであったが、山の素晴^{すば}らしさを伝える先生の率直な言葉を聞いて、家族に山の魅力をありのままに伝えようと思った。

問八 ――線部⑦に「ここを託すなら、あなたのような山好きの素人がいい」とありますが、「山小屋のご主人」が「わたし」に山小屋を譲ろうと考えたのはどうしてですか。六十字以内で説明しなさい。

【下書き欄】—— 必要ならば使いなさい。

問九 ― 線部⑧に「わたしは想像する」とありますが、このときの「わたし」の心情について説明した文として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 山登りをする学生さんの達成感に満ちた表情を見て、晴彦はるひこと一緒に山に登れば、晴彦もまた一人前に成長した姿を見せてくれるだろうと楽しみにしている。

イ 晴彦との関係性は必ずしも良いものではなかったが、山小屋という、家族とともに暮らす環境を整えさえすれば、再び理想の家族を取り戻せるのではないかと夢見ている。

ウ　生き生きと山登りをしていた学生さんの姿を見て、晴彦も一度山に登りさえすれば、山小屋を買ったことを嬉しく思ってくれるはずだと確信している。

エ 山への愛情を伝えることで、晴彦が山に興味を示してくれて、お互いの距離が縮まり、自分の生き方についても理解を示してくれるかもしれないと期待を抱いている。

オ　山の魅力を語るうちに晴彦が心を開いてくれて、ともに山小屋で働いてくれば、これまでの自分の人生も少しは報むくわれることになるだろうと信じている。

四、次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

① 若者や子供は、新しいものに目を輝かせる。「面白い」というよりも、「可能性」のようなものに惹かれていくのかもしれない。つまり、「面白そうだ」という感覚である。面白いかどうかは、試してみないとわからない。だから「試してみたい」との欲求である。

子供が、なにを見ても、「やらせて」とせがむのを、大人は知っている。逆に、大人になるほど、手を出してみても、自分の得にならない、という悟りを開いてしまうのだろう。

子供は「無知」であるから、知らないことが周囲に沢山ある。それらを知ることが、「面白い」のだ。おそらく、知識を得ることで自身が有利になれるとの「予感」があるためだろう。知らないよりも知ることが有利だ。他者との競争にも勝てるし、自身の将来の可能性を広げるだろう。つまり、好奇心とは自分が「成長」するイメージを伴うものである。

この自身の「成長」が「面白い」と感じられるのは、躰を鍛えたり、技を磨くための練習が「面白い」ことにもつながる。いずれ得られる満足を予感させる「面白さ」といえるものだ。

これらの「新しさ」が、「面白さ」の鍵になることは、非常に重要なので、これについては、さらに掘り下げて、^{*}後述したい。

「新しさ」に含まれるのかもしれないが、「意外性」というものも、「面白さ」を誘発する要因、あるいは条件といえるだろう。② 僕は、ミステリイを書いているので、これを常に意識している。

「意外性」というものが存在するのは、人間が未来を予測するからだ。人によって予想の範囲や緻密さはさまざまだが、誰でも、今後どうなるのか、ということを意識的に、または無意識のうちに頭に思い描く。この行為自体が、人間の特徴でもある。

動物でも、この種のことにはある。例を挙げよう。僕の奥様（若い頃に苦勞をかけたため、あえて敬称で書かせていただいている）は、毎日、近所の夫婦と犬が訪れるのを待っている。うちにも犬が何匹かいるので、犬たちもこれを楽しみにしている。また、奥様は、そのときにビスケットをポケットから出して、犬たちにあげることにしているので、それを覚えた近所の犬は、うちへ来たくてしょうがない。近づくとき、自分から庭園内に入ってくるようになった。うちの犬たちも、友達が来ることをとても喜んでいる。何故なら一緒にビスケットがもらえるからだ。

最近、その様子を眺めていたら、近所の犬がまだ百メートルほど離れているのに、うちの犬たちは早

くも発見し騒ぎ始める。そして、大喜びして、奥様の前におすわりしてじつと顔を見る。一匹は立ち上がって、奥様のポケットに鼻を突っ込む始末である。

最初の頃は友達の犬が来ることを楽しみにしていたのだが、今では、友達を歓迎するよりもビスケットの方が優先になった。犬でも、これくらい未来を予想している、ということだ。

「意外性」とは、その人が思い描いていない未来が訪れることだ。これは、普通は「面白い」ことではない。もし、バスケットがもらえなかったら、犬はがっかりする。いったい何が起こったのか、とAとほう途方に暮れる結果になるだろう。人間の場合も、想定しない事態が発生することは、歓迎できる状況ではない場合が多い。特に、予期せぬトラブルなどは困る。というよりも、想定外の悪い事態をトラブルと呼ぶのである。

ところが、③その意外性が、「面白さ」になる。ここは、さすがに犬ではなく人間だから、といえるかもしれない。すなわち、「意外性」の「面白さ」を理解するには、ある程度の思考力や知性が要求される。

突拍子もないことが起こると、人はまずは驚く。意外なことに対しては、びっくりするのが最初の反応だろう。しかし、それが「面白さ」に変化する。たとえば、ギャグの中には、この意外性がある。変なことを言うな、という驚きがある。もちろん、定番になって、来るぞ来るぞと期待したところへ出てくるギャグもあるが、慣れてしまうと、普通は笑えなくなるものだ。これは、意外性がなくなるからにほかならない。

「面白さ」というのは、このギャグからもわかるように、意外性のあるものに感じることもあれば、自分が思ったとおりになったときにも感じられる。両者は相反する条件なのに、いずれも「面白さ」がある、という点は、④非常に不思議だ。

⑤同じことを繰り返して「面白さ」を感じるのは、どちらかというと動物的である。何故なら、犬を観察していると、同じような遊びを繰り返すことが多い。ボールを投げれば、走っていき、それをくわえて持ってくる。何度もそれをしたがる。面白いと感じていることは確かだ。一方で、同じことに厭きてしまうのは、人間に多く見られる傾向といえるだろう。もっと違う遊びがしたい、と人間の子供だつたらいいそうだ。

ミステリーのトリックやBどんでん返しは、読者を楽しませるアイテムといわれている。ミステリー

が好きな人は、「意外性」を求めて読むことが多い。本を読みながら、自分でも推理を試みる。いわば、作中の探偵役に挑戦しているような形になる。そして、どちらかというと、自分の推理が当たっていた場合よりも、推理が外れて、意外な結末になった作品を「面白い」と評価する傾向にある。

簡単に結末がわかってしまうミステリイは、面白い作品だとはいわれない。ここが不思議なところで、問題が解けたという快感よりも、解けなかった方が「面白い」と感じるのだ。

もともと、もう少し詳しく考察すると、ただ謎が難しければ良い、ということでは全然ない。解けない問題はいくらでも作ることができる。だが、難問では、答を明かしたときに「意外性」を感じられない。「いくらなんでも、そこまでは考えられないよ」と思われては、「面白い」にはならない。

たとえば、犯行が不可能と思われた殺人事件の犯人が、透明人間だった、という小説ではお話にならない。これは「意外性」としては充分にあるはずだが、認めてもらえない。思いもしないものだからといって、すべてが「面白い」わけではないのだ。

答が明かされたときに、「ああ、そうか」という納得が得られなくてはいけないし、さらには「それは思いつかなかった。でも、いわれてみれば、そうだな」というように、手が届くところに答があったけれど、ちょっと方向がずれていた、というような⑥「ぎりぎり」の感覚が求められるのだ。野球でいえば、コースを大きく逸れた明らかなボールを投げてても空振りには誘えない。ぎりぎりストライクか、というボールを投げるから、三振が取れる、といったところだろうか。

誰も解けない難しい問題を作ること、みんなが正解する易しい問題も、どちらも作るのは簡単だ。難しいのは、平均点が五十点になる問題である。「面白い問題だ」と感心させるには、平均点が三十点くらいが良いかもしれない。

「面白さ」の要素として「突飛」なものがある。⑦「突飛」な「面白さ」は、「意外性」による「面白さ」とは、少し違っているように思える。

「意外性」は、なんらかの予測があるところに提示され、そのズレで面白さが誘発されるが、「突飛」というのは、もっと不意打ちに近いものだ。予測もしないところへ、まったく違った方向から飛んでくるようなものである。多くの人はあつけにとられ、ただ驚くばかりかもしれない。だが、人によっては「面白い」と感じる要因の一つとなりうる。

小説を書いているときによく感じるものでは、ちょっとした比喩、あるいは言葉選びなどで、これが

表れる。普通は使わないもの、全然関係のないものを突然持ってきて、なんとなく説明してしまう。日本語には、「くのような」「くみみたいな」という形容があるが、ここに全然無関係のものをに入れて、連想を誘う。まったく別物なのに、なんとなく似ているし、感じが伝わることもある。

「蝶のように舞った」^{ちよう}「花のように可憐な」^{かれん}では、普通すぎて面白くもなんともない。こういうありきたりの比喩は文字を無駄に消費しているだけで役に立たない。これが、「捨てられたガムのように寂しかった」^{さんかくすい}「三角錐みたいに切り立った星空だった」などとすると、読者の思考は「瞬そこで止まるだろう。何なの、それ」と思うのが普通だ。だが、一部の人には、これが「面白い」と感じられるのである。

これらは、突飛な「面白さ」といえるもので、「意外性」に含まれるようで、微妙に^{びみょう}ベクトルが違っている。相手に一瞬足を止めさせ、あるいは息を止めさせ、考えさせる、という機能では「意外性」と同じだが、予想させないところが異なる。

突飛なものに出合い、一瞬呆れたり、首を傾げたあと、「面白い」と感じるかどうかは、自分にそれが思いつけたか、と過去へ向かって予測し、遅れて「意外性」として評価される、というメカニズムといえる。

「思いつかない」というのも、「面白さ」の中でも重要な^{*3}ファクタである。簡単にいえば「発想」だ。手法や計算で導かれるものではなく、直感的なもの、いうなれば思考のジャンプを見せられるような「面白さ」である。

——森博嗣『面白いとは何か？面白く生きるには？』による

（問題作成上の都合から一部原文の表記を改めた）

（注）*1 後述したい……本文に続く部分で書かれている。

*2 ベクトル……ここでは、方向性という意味で用いられている。

*3 ファクタ……要素。

問一 〜〜線部A「^{とほう}途方に暮れる」、B「^{けっこん}どんでん返し」について、これらの言葉を本文中と同じ意

味で使っている文として最もふさわしいものを、次のア〜オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

A「途方に暮れる」

ア よく物忘れをする彼は、途方に暮れる性格だと友達から言われている。

イ どの道を進んでもゴールにたどり着くことができず、途方に暮れることになった。

ウ 途方に暮れる夕日を眺めながら、私たちはいつまでも語り合った。

エ 計画を立てて試験に臨んだために良い結果が出せて、思わず途方に暮れる。

オ 絶対に宇宙飛行士になるんだと、彼はいつも途方に暮れる夢を語っている。

B「どんでん返し」

ア どんでん返しの性格である二人は、幸せな結婚生活を送った。

イ これまで受けた恩に感謝の気持ちを持って、上司にどんでん返しをした。

ウ 短気な父親は、気に入らないことがあると、いつも食卓をどんでん返しにする。

エ 風邪が治っていないのに公園で遊んだため、どんでん返しまでしてしまった。

オ 戦後の混乱期を生き抜いた彼の人生は、まさにどんでん返しの連続だったといえる。

問四

——線部③に「その意外性が、『面白さ』になる」とありますが、それはどうしてですか。その説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 犬は予想外のことが生じた時にはがっかりしてしまうが、人は時に想定しない事態が起こってしまうという偶然性くうぜんに対して面白さを覚えるものだから。

イ 人にとって想定しないことが起きることは避さけたいものであるが、その状況じょうきょうを前向きに捉とらえることで、事態を好転させることに面白さが存在するから。

ウ 自分が予想したと違う状況に直面したときに人は戸惑とまいを覚えることが多いが、思考力や知性によって、その戸惑いを解消していくことに面白さを感じるから。

エ 人は、あらかじめ予測していたこととは異なる事態が生じたときに驚おどろきを感じるが、その事象に対して思考力を働かせることで、面白さが見えてくるものだから。

オ 犬は繰り返し起こる現象に対してだけ面白さや楽しみを抱けるが、人はより高度な知性を働かせることで、未知なる面白さを求めることができるから。

問五

——線部④に「非常に不思議だ」とありますが、どういうことが「不思議だ」といえるのですか。その説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 一つの事象に対して相反する印象を持つことで、より面白く感じられること。

イ 定番化されていく中で面白さが薄うすれていったものにも、まだ面白さが残っていること。

ウ 想定外であるか否いなかにかかわらず、面白いという共通した感情を抱いてしまうこと。

エ かつて面白かったことでも、時間とともにその面白さが失われてしまう場合もあること。

オ 意外なことが起こったときに驚いたとしても、後に面白さを感じることもあること。

問六 —— 線部⑤に「同じことを繰り返して『面白さ』を感じるのは、どちらかというと動物적이다

る」とありますが、「動物적이다である」といえる具体例として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 初めて乗ったジェットコースターが気に入って、何度も乗りたくなる。

イ 通学路を歩きながら、日々変わりゆく季節の変化に気づく。

ウ 素振りを繰り返すことで、自分の理想とする打撃フォームを見いだす。

エ 初めて同じクラスになった友達と、いつも一緒に下校する。

オ 酸っぱそうな梅干しを見るたびに、思わず唾液がたくさん出てしまう。

問七 —— 線部⑥に「『ぎりぎり』の感覚が求められるのだ」とありますが、それはどういうこと

ですか。その説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 手が届きそうで届かないような難易度の問題を解く際に、答えを見つけ出せるかどうかという

緊張感を味わえる場合にのみ、人は面白く思えるものだということ。

イ 解けるかどうかかわからないくらい難しい問題が、ようやく解けた時に得られる高揚感を繰り返
し味わうことに、人は面白さを抱くものだということ。

ウ 容易には答えを見つけることができず、しかも後から考え直した時に、答えられてもおかし
くなかっただろうと思える問題に対して、人は面白さを感じるものだということ。

エ よくよく考えれば答えを導き出すことができたはずだと思うものの、自分では思いつくことが
できなかったという悔しさに、人は面白さを覚えるものだということ。

オ 事前に思いついた答えが間違っているても、正解に手が届きかけていたと納得できる問題であ
れば、さらに難しい問題に挑戦する気持ちが刺激され、人は面白く感じるものだということ。

氏名

番

二〇二一年度

【注意】 解答はすべてこの解答用紙に記入すること。

得点合計

①	
②	
③	
④	
⑤	

①	-----	-----
②	-----	-----
③	-----	-----
④	-----	-----
⑤	-----	-----

問一

A
B

問二

--

問三

--

問四

--

問 七

100

問一

A
B

問二

--

20

問五

問六

問七